



夢のつばさプロジェクト 2012年度 春キャンプ 学生報告

●主催

夢のつばさプロジェクト

特定非営利活動法人 お茶の水学術事業会

特定非営利活動法人 全国てらこやネットワーク

特定非営利活動法人 遺伝カウンセリング・ジャパン

特定非営利活動法人 ウェアラブル環境情報ネット推進機構

共催・協力団体一覧（敬称略）

●共催

公益社団法人 花巻青年会議所

●協賛

独立行政法人 宇宙航空開発機構(JAXA)

独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)

公益社団法人 釜石青年会議所

桜蔭会岩手県支部

国立大学法人 岩手大学

NPO 法人 hands

花巻UC

●特別協賛

株式会社ブリヂストン

1. 春キャンプ開催に至った経緯

夢のつばさプロジェクトはこれまでに東京で2度のキャンプを行ってきたが、岩手県からは問い合わせはあったもののまだ参加がない。遠く東京のキャンプ地まで子どもたちを招くことは、その時間的な課題もあってかなり難しい。そのため、かねてより岩手の子どもたちに対しては、現地に赴いての活動実施を模索してきた。夢のつばさプロジェクトの、設立当時から協力していただいている全国てらこやネットワークの湯沢大地氏、元岩手県教育長・五十嵐正氏、桜蔭会（お茶の水女子大学同窓会）岩手県支部の支部長大畑正子氏ら有志と相談を重ねて、2011年10月には、春に実施する活動の下見のために牧場等の調査を行った。

こうした中で、2012年5月20日の花巻青年会議所（以下、花巻JCと表記する）の創立55周年記念行事に科学イベントを開催したい旨、室伏きみ子・お茶の水女子大学教授（夢のつばさプロジェクトの企画担当）に企画依頼があり、赤沼範高花巻JC理事長との話し合いの中で、5月19、20日に夢のつばさプロジェクトの春キャンプを岩手県遠野・花巻で開催すること、20日の花巻青年会議所創立55周年記念行事の科学イベントを、夢のつばさプロジェクトと花巻青年会議所とで合同開催することが取りきめられた（この科学イベントには、室伏教授の紹介により、JAXA川口淳一郎氏の講演、NEDOの子ども科学教室開催が誘致された）。

また同時期には、2011年度の夢のつばさプロジェクトの事業目標の一つとして「医師、心理カウンセラー、遺伝カウンセラーらによる相談業務を行ったり、いずれは進学や就職などの進路相談にも当たることができるよう、常時連絡や相談を受け付ける場を設けるべく検討を行う」としたことに對して、具体的な対応を開始していた。これまでに何度か参加して下さった子どもたちの保護者の方たちとの面会の機会を作り、こうした活動にご意見を伺いたいと調整中であったため、春キャンプ開催の19日に子どもを遠野での活動に参加させ、その間に、保護者の方々と仙台で話し合いの場を設けることとした。保護者の対応については夢のつばさプロジェクトの室伏きみ子、滝澤公子と心理カウンセラー・河野貴代美氏（元・お茶の水女子大学教授）があたり、20日に花巻に合流すること、19日の遠野の牧場体験については、てらこやネットワークと花巻青年会議所を中心として、他の団体の方々と協力して事業を行うことが決まった。今回は、花巻JCとの共催であることもあり、孤児・遺児に限らず、被災地の子どもたちに広く呼び掛けることとし、募集に当たっては、釜石JC、遠野JCなどのご協力を得た。

キャンプ1日目（19日）の牧場体験ではhandsや花巻JCのご協力をいただいた。H.u.G.plat遠野の方々には、心をこめた対応と参加費を割安にさせていただいたことを感謝申し上げる。キャンプ2日目の5月20日には夢のつばさプロジェクトと花巻JC 55周年記念事業の共催の科学イベントに参加し、宇宙航空開発機構(JAXA)、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)提供による科学体験をすることができた。

2. 遠野と花巻での活動

遠野でのキャンプを開催するにあたり、学生ボランティアは以下の目標を立てて活動した。

- ・岩手県内で復興支援に取り組んでいる様々な団体と協力してキャンプを行うことで、今後に向けた協力関係を築く。
- ・現地の活動を通して被災地の実情を知り、求められている支援のかたちを調査する。

1点目については、花巻JCと共催し、H.u.G.plat 遠野やhands、岩手大学、釜石JCといった岩手県を拠点とする様々な団体とともに活動することができ、より大規模で活気のあるキャンプになった。活動の中で現地の方ならではの貴重なご意見をたくさんいただくこともでき、今回のキャンプ運営で経験したことはすべて今後の活動に生かしたいと考えている。同じ県内で生活し、歳も近い岩手大学のみなさんや花巻UCのみなさんと子どもたちの交流には学ぶべき点があったと考える。



馬との触れ合い



背中に乗せてくれてありがとう

2点目については、今回のキャンプの中で、どんな企画を楽しんでいるか、東京の学生に対してどういう印象を持つかなど、子どもたちの様々な発言に注目した。今までのキャンプでは子どもたちの地元から遠く離れた地でのキャンプであったため、子どもたちは学生に甘える場面が多かった。今回、子どもたちが暮らす地域でキャンプを行ったならば、子どもに、地元で学生を迎える意識が芽生えるかもしれない。「東京からやってきたお兄さん・お姉さん」として子どもたちに対して、何が出来るかを考えたいと話し合い、子どもたちがどのように学生を受け入れ、どのような接し方をするのか、捉えるように心がけた。学生は今までと同様、保護者の元を離れた不安を和らげるよう留意したが、また、日常生活に関する発言の端々に現れる震災に関することにも注意した。子どもたちの些細な反応にも気を配り、キャンプ後の反省会ではそれらの反応を学生全体で共有した。

学生と子どもの交流以外にも、夢のつばさプロジェクトの室伏教授と滝澤講師、及びカウンセリングの専門家であるお茶の水女子大学・元教授の河野貴代美氏が宮城県からの参加者の保護者のもとを訪れ、お話を伺ってきた。混乱の時期を過ぎて、被災した方々、身内を亡くされた方々

が改めて悲しみを深くされていることを知って、私たちが子どもたちだけでなく、保護者の方々に対しても力になれることはないか模索していきたいと思う。

1. でも述べたが、今回は岩手県内の子どもたちを対象として参加者を募集した。夢のつばさプロジェクトは今まで震災遺児・孤児を対象にキャンプを行ってきたが、各地の教育委員会でも個人情報保全に留意しており、孤児・遺児のみに声をかけて参加者を募ることは非常に難しいことが分かっている。今回は花巻青年会議所の記念行事との共催でもあり、できるだけ多くの子どもたちに参加してほしいと、参加者を遺児・孤児に限定しなかった。釜石 JC をはじめ関係者が教育委員会を訪問しキャンプ参加者募集に奔走してくださったおかげで、岩手県釜石市と大槌町の小学校・中学校・高校にキャンプの案内を送ることができ、結果として岩手県内から総勢44名の子どもたちがキャンプに参加してくれた。中には震災孤児・遺児も数名含まれていたと考えられるが、その情報は入手していない。また、岩手県内の子どもたち以外に、前回までのキャンプ参加者にも当キャンプの募集要項を送付したところ、5名が参加してくれた。

キャンプ参加者内訳

学年	人数
小学1年生	1
小学2年生	9
小学3年生	13
小学4年生	6
小学5年生	13
小学6年生	5
中学2年生	2
合計	49

< 牧場体験 >

牧場体験は青笹牧場にて H.u.G.plat 遠野の方々が「乗馬体験」や、「蹄鉄投げゲーム」、「餌やり体験」などを事前に企画・準備してくださっていた。当日も各企画に H.u.G.plat 遠野の方々や hands の方がスタッフとして子どもたちの活動をサポートしてくださった。子どもたち一人一人の興味・関心を優先し、当初の班行動を変更して、子どもに学生が1人以上一緒に行動することで個人行動にした。食事だけは班ごとにテーブルを囲み、学生と子どもとの交流や子ども同士の交流を楽しんだ。

< キャンプ場 >

体験プログラムを順調にこなすことができたため、今後のスケジュールを考えて30分早く牧場を出発した。

キャンプ場についてから、テント張りとかレー作りに分かれて活動した。総勢120名分のレー作りは予想以上の時間がかかったが、その分濃密な時間を過ごすことができた。班対抗のレ

クレーションを行ったり、ギターの伴奏で「つばさをください」を歌ったり、子どもたちは楽しそうだった。

その後、入浴し、慣れない寝袋で睡眠を取った。学生は班長らによるミーティングを行い、1日目を終了した。



えさ作り



皆でお掃除



馬に乗れたよ！



蹄鉄投げゲーム



馬のスケッチ中



テントを張るのは大変だ



キャンプファイヤーを囲んで
「つばさをください」を合唱

<夢のつばさプロジェクト／花巻青年会議所創立55周年記念事業・共催科学イベント>

2日目は、夢のつばさプロジェクトと花巻JC55周年記念事業の共催の科学イベントに参加した。JAXAの川口淳一郎氏は、夢のつばさプロジェクトのために、既に入っていた予定を変更して、花巻での講演をご承諾くださったそうだ。川口さんのお話はとても興味深く、子どもたちも一生懸命聴いていた。後述するように、特に高学年の子は、興味を示した様子であった。JAXAから、宇宙船はやぶさや小惑星イトカワの模型、宇宙服といった貴重な展示物を持ってきていただき、宇宙服を着用させていただいて、宇宙旅行の気分を味わった子どもたちもいた。NEDOの方々のご協力によるソーラーカーづくり教室や、持ってきていただいたアザラシロボット・パロも大人気であった。

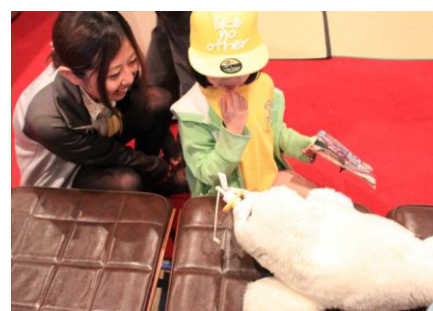
昼食後、会場前の公園でドッジボールなどを楽しんで、ほぼ予定通りに日程を終えることができ、全員の保護者に無事送り届けることができた。



ソーラーカーで競争



みんなでドッジボール



アザラシロボット
パロもやってきた

3. 子どもたちとの交流

春キャンプを行う上で、学生スタッフは以下3つの目標を持っていた。

- ①お友達をたくさんつくろう！
- ②興味を広げよう！
- ③集団行動を心がけよう！

① 今回の参加者は同じ小学校から友達同士で参加しているケースが多かった。しかし、せっかく集まった同年代のしかも同じ地域に住んでいる子どもたちなのだから、新しく友達を作りたいと考えて、班分け等で可能な限り学校がバラバラになるよう工夫した。最初、バスで子どもたちを迎えに行った際はやはり同じ学校、同じクラスの友達と固まっていたが、牧場に着き、班行動になると、学生とも打ち解けてくれ、初対面の子どもたちとも仲良く活動に参加するようになった。予想外だったのは、学年を超えての交流が盛んだったことである。今回のキャンプでは高学年の子どもたちが積極的に低学年の子どもたちの世話をしたり、手伝ってあげたりする光景が見られた。

② 牧場で馬の不思議について教えてもらったり、2日目の講演会で宇宙の神秘に触れたりする中で子どもたちの好奇心が喚起された様だった。そんな時に学生が「どうしてなんだろうね」と声をかけるなどして、その興味をその場限りのものにしてしまわないよう配慮した。実際、牧場で馬のスケッチをしている時に「馬って優しい眼をしてるんだね」というような発言が見られ、学生が「そうだね。まつ毛も長いね」と会話を膨らませていたし、乗馬体験についても、「馬って見ているよりよりも大きかった！それにすごい揺れたよ」という感想に牧場の方が説明をしてくださっていた。テント張りの場でも、子どもたちはテントを張るために使う様々な道具に興味津々で、道具の使い方や、釘を打つ角度などを学生に教えてもらいながら実践していた。キャンプファイヤーでは薪を足すたびに大きくなる炎や舞い上がる火の粉に歓声を上げていたのが印象的だった。2日目の講演会でも高学年の女子児童は「とても面白かった」と学生と講演内容について話していた。講演会後のソーラーカー作りには多くの子どもが興味を示し、会場の前の公園で、ひなたを見つけては走らせたり、自分たちで影を作って止めたりと工夫して遊んでいた。夢のつばさプロジェクトのキャンプでは普段子どもたちができないような体験をしてもらいたいと考えており、今後のキャンプでも子どもの興味関心に敏感になるという心掛けは継続していくべきだろう。

③ 集団行動に関しては参加人数が多いということで、きちんと時間通りに行動するよう子どもたちに伝えた。全体での集団行動は人数が多すぎて難しい面もあったが、班内での集団行動は

よくできていた。スケジュールの決まっている企画でも子どもたちは素直に遊びを切り上げ、次の企画に移ってくれた。企画以外の時間にも班内での交流は盛んであった。特にバス移動の時間は子どもたちにとってはかなり自由に学生とも他の参加者とも交流できる貴重な機会だったようだ。バス内では班ごとに固まって座ってもらっていたのだが、そこで記録係の学生のカメラを借りて友達や学生の写真を撮ったり、しりとりをしたり、とてもリラックスしながら班内での交流を楽しんでいるように感じた。こういった時間の中で学生に心を開いてくれたようにも思う。

キャンプ全体を通して、子どもたちは満足して帰ってくれたようだ。閉会式やバスでご家族のもとへ送り届けたときにも、まだ帰りたくないと訴えたり泣き出したりする子どももいた。子どもたちがこのような反応を見せてくれたのは、学生一人一人が子どもたちに真剣に向き合った結果であると考えている。またこうしたつながりを作った責任も感じる。一緒に遊びながらも、何かあれば寄り添う、ていねいに話を聞く、そのような接し方を学生は意識してきたが、この方法を今後も続けていきたいと思う。

学生はキャンプ前に、「子どもたちから震災関係の話を持ちかけられたとき、どうすればいいか」について心理カウンセラーの方の講演を聞きキャンプに臨んだ。そこでは「受容と共感」が大切だというお話があり、どう反応したら良いかわからない発言にも否定をしたり、話をそらしたりするのではなく、「そっか」と受容し、「つらかったんだね」「かなしかったね」と子どもの気持ちに共感することが大事と伺った。しかし、実際に上記のような発言を聞くと、「そっか」と受容し、「大変だったね」「つらかったね」と声をかけても、それからどうすればいいかわからず、困惑してしまった学生も多数いた。夢のつばさは長期的な支援を目的としている。そのためには子どもたちの震災経験をどう受け止めていくかは避けては通れない課題である。今回得た経験を基に、心理カウンセラーや多くの方々の助言を頂きながら、よりよい方法を考えていきたい。

4. 今後に向けて

①キャンプ運営に関して

キャンプ運営に関して、夢のつばさプロジェクト内でも以下の点を改善していきたい。

・班制度の見直し

班制度をとることで行動しやすいという利点があるが、その一方で班を超えた交流が難しくなる。班の中での子どもたち一人ひとりに対する対応も改善の余地があるだろう。

・当日スタッフの受け入れ

鎌倉てらこや、岩手大学、花巻 UC の3団体に当日のスタッフとしてご協力いただき、大変ありがたかった。しかし当日の合流ではなかなか意思の疎通が図りにくい。今後は事前ミーティングを行うべきだろう。

・企画の予定調整の徹底

事前段階での予定調整が不徹底だった。結果として大きな遅れはなかったが、1日目には様々な予定変更があった。今後はより情報交換を密に行いたい。

②春キャンプ参加者について

閉会式のときに涙を流しながら「まだ一緒に遊びたい」、「帰りたくない」と言ってくれた子どもたちを見ると、彼らとの関係を終わりにしたくないという思いが募った。震災の話が多くの子どもたちから聞かれたように、被災経験をしていない学生に話すことで子どもたちの中でなにか変化があったかも知れないし、まだまだ話したいことをたくさん抱えている子どももいることだろう。ただつらい経験を誰かに話したいだけ、という子どももいるかもしれない。そういった心のモヤモヤを抱えた時に、彼らと日常的に会うことのできない東京の学生にだからこそ話せる、甘えられる、わがママが言える、という子どもも多いのかもしれない。そうした子どもたちの期待にどう応えていくかは今後の課題である。

それだけではなく、春キャンプを通してせっかくできた新しい友達との関係も維持してもらいたいと考えている。それはキャンプの目標に「友達をたくさん作ろう」と掲げた責任でもある。参加者の多くは仮設住宅に住んでいる子どもたちで、仮設住宅間では運動会などで交流の機会があると聞いたが、仮設住宅以外に住んでいる子どもたちとの関係はますます希薄になってしまっているようだ。また、保護者の方からも、仮設住宅には子どもがいる家庭が少なく、今回のキャンプのように大勢で遊ぶ機会が少ないというお話を伺った。そういった点からも、今後、彼らとどのように関わって行くかが課題である。

③メディア対応について

今回、春キャンプの活動が地元新聞、地元テレビ、NHK等々のメディアにとり上げられたが、

事前に夢のつばきプロジェクトには連絡がなく、放映、新聞掲載なども知らされていなかった。本プロジェクトの開始以降、いくつかのメディアから取材の打診があったが、夢のつばきプロジェクトとしては取材を承諾して来なかった。これは活動の対象が、親を亡くされた子どもたちであり、報道によって、個人情報明らかになる可能性、そのことによる人権被害が起こる可能性を考えてのことである。各県の教育委員会等からも、個人情報の取り扱いには厳重に注意してほしい旨、要請されている。

2012年度春キャンプは、親を亡くされた子どもを対象とした活動ではなかったが、問い合わせを受けていれば子どもたちを守るためにお断りをしたはずであり、夢のつばきプロジェクトとしては困惑しているのが現状である。今回、多くの団体が協働で事業に当たり、意志疎通が図りにくかった点は否めない。今後はしっかりとした対応を行っていきたいと考えている。

④夢のつばきプロジェクトならではのキャンプ

今回のキャンプでは多くの現地の方々と交流することができて、貴重な体験であった。ただ子どもたちが楽しんでくれるキャンプで終わらせるのではなく、保護者の方々が望んでいることや現地の皆様からのアドバイスなどを織り込んだキャンプになるよう、努力していきたい。夢のつばきプロジェクトは、子どもたちが普段できないような活動をキャンプで行いたいと考えている。年齢が近い学生だからこそできること、東京で活動しているからこそできること、様々な大学からボランティアが集まっているからこそできることなど、夢のつばきプロジェクトならではの活動をブラッシュアップしていきたいと考えている。